英知通信

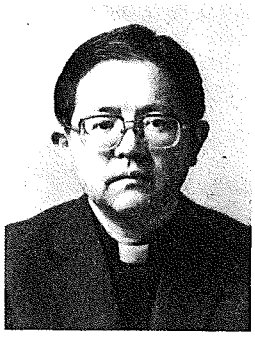
発行
英知大学
兵庫県尼崎市若王寺
2—18—1　(〒661)
℡ (06) 491 — 5083
編集
英知大学広報室

1985. 5. 31.　UNIVERSITAS SAPIENTIAE　No. 43

入学式式辞

グローバルな視野で世界と自己を見つめよう

学長　井上博嗣



入学を祝して

本日ここに、ご父兄の皆様方のご列席のもとに、新入生二五三名をお迎えして、昭和六十年度、英知大学第二十三回入学式を挙行する事ができます事は、私たちにとりましてこの上もない喜びであります。

新入生の皆さん、入学おめでとう。ご父兄の皆様方、私たち英知大学の一同は心からご子息・ご令嬢のご入学をお喜び申し上げます。

新入生の皆さん、皆さん方は今や人生の新しい第一歩を踏出そうとしておられます。今日この日から始まる最高学府、大学での四か年にわたる生活を展望する時、皆さん方の胸は、湧き出る青春の血潮と共に、新たなる希望で脈動していると同時に、いちまつの不安をも隠し得ない心境であろうかと察するものであります。

本学建学の精神にのっとって

大学への入学というこの記念すべき晴れの門出に当って、私は皆さん方に英知大学で学ぶ意義について認識して頂きたいと思うのであります。

そもそも大学は決してたんなる知識人や教養人を育成するための限られたエリートにとっての教育機関ではありません。英知大学の建学の精神は、カトリック大学としてキリスト教的ヒューマニズムに基づく人間教育を目指し、健全な価値観と豊かな国際性を身につけた円満な人格の形成を目標とする所であります。この崇高な建学の精神にのっとって、私は、皆さん方に学問の研究並びに先生方や学友との触れ合いを通して、広くグローバルな視野に立って世界を眺めると共に、自己を見詰める事のできる幅の広い、調和のとれた人間になるように心掛けて頂きたいと願うものであります。

世界を眺める

西暦二千年まであと僅か十五年、皆さん方は三十代の前半で新世紀を迎える事になるのです。その時には、皆さん方はそれぞれ各界のリーダーとして実社会の第一線で活躍され、或いはまた家庭にあって子女の養育に励む母の座についておられる事と存じます。刻々と変り行きつつある世界情勢の中で、やがて来るべき二十一世紀が果してどのような夜明けとなるであろうか——全知全能の神ならでは誰も確実に予言できる者はありません。現在四十七億を数える世界の人口は、西暦二千年になると約六十五億になる事が予測されておりますが、それはあくまでも世界戦争や異常な天変地異がなく、平和な世紀末を送る事ができるという大前提に立っての事であります。これからの十五年は人間理性と実践力とが、これまでには見られなかった程の試練にさらされる事を覚悟しておかなくてはなりません。と申しますのは、たとえ核戦争による地球破滅という最悪の状態が起らないとしても、アフリカ大陸を始めとする低開発国では現状のままで放置されますと食糧不足による飢餓状態がますます深刻化する事が予想されているからであります。世紀末に生きる人類に背負わされた試練の最たるものが、人間が生存し得るか、それとも死滅に向かうか——まさにハムレットの「生きるか、死ぬか、それが問題だ」という言葉を連想させるような、かって見られなかった深刻な試練であると言っても決して過言ではないでしょう。人類共通の唯一つの住みかである地球——宇宙飛行士たちの目から見れば最も美しい、緑の衛星であるはずの地球——は今や余りにも恵まれた飽食地と、それとは全く対照的に生き地獄さながらの飢餓地とに二分されており、後者では約十億の人々が飢えと栄養失調の中で耐え続けているのが、赤裸々な現実なのであります。そして今まさにこの時点におきましても飢餓死寸前の人口が約四億五千万人にも及んでいるのが偽らざる現状なのであります。

ところで、今日全世界で支出されている軍事費は約一兆ドルに達すると言われております。もしもこの一兆ドルのわずか〇・五%を節約するならば、結構五百万人もの子供たちの命が救われる事になるのです。

我が国は既に昨年だけでも百五十億円分の食糧援助を行ったとはいえ、それでもアフリカの現地ではまだまだ焼石に水といった程度にしか過ぎません。

第二次世界大戦終結後四十年間、幸いにも平和憲法の下に戦争を体験しなかった我が国が目覚しい高度経済成長を遂げ、筑波科学万博によって象徴されているようなハイ・テクノロジー先進国という名をほしいままにする事ができた私たちにとって、今や最大の課題は何でしょうか。それは余りにも恵まれた我が国の現状に一人安住する事なく、民族国家の枠組を超えて、はるか地球の裏側に生きる人々、否、死に向いつつある人々の問題と私たち自身の切実な問題と見なし、人間皆兄弟であるという感覚を身に付け、国境を超えた私たちの仲間のために何ができるかを真剣に考えると共に、後進国の人々との福祉を前提とし、且つこれを優先してこそ、初めて私たち自身をも含めた世界人類の平和が維持されるものである事を自覚する事ではないでしょうか。

天然資源がぜろで、G・N・Pだけがアメリカに続いて世界第二を誇る我が国、しかも国民の九十%までが中流意識を抱いていると言う世界中にまれに見る程恵まれた我が国—我が国ほど資源を発達途上国に依存しているような国は他に例を見ないのです。二十一世紀に目を開き、洋洋とした未来に向って前向きの姿勢で歩み行く事ができるように、今日この日から生涯教育の基礎作りとしての大学での、学問研究による人間形成の場に迎え入れられた皆さん方に、私は国際的感覚を身に付けた人間、すなわち何事につけ、グローバルな視野で考え且つ行動し、自分自

身のマイホーム的な安易な幸せよりも、広く四海同胞人間皆兄弟姉妹である事の認識に基づいて、他者の幸福を追求する生き方を身に付けた人間となるように努力される事を願って止みません。本学で学びとる豊かな知識や幅広い教養は、世にあって我が身を立てるためでなく、身を尽し、意を尽し、力を尽し、精神を尽し、ひたすらに神と人々とに仕えるためにこそ、極めて貴重なものである事を自覚して頂きたいのです。

「教養とは何か」と問われるならば、「幸福論」を著わしたヒルティが「利己心を克服する」事をもって教養の第一義と明言した事を見直して見たいと思います。真の教養の持主とは、自分自身の見解だけを絶対視するような身勝手な幻想に陥る事なく、喜んで他人の言葉に耳を傾け、ちっぽけな自我を超越して、あくまでも相手の立場に立ち、ひいては第三者的な客観的な立場に立って、多角的、多面的な対象をとらえ、世界を眺めると共に自己を見詰める心の余裕のある人を指すのではないでしょうか。

自己を見詰める

「自己を見詰める」――そうです。自己発見と自己確立とは、今まさに青年期を送りつつある皆さん方にとって重大な発達課題の一つなのです。

今から丁度三十年昔、この世を去ったイスパニアの偉大な思想家オルテガ・イ・ガセットは、人間が人間自身に最も深くかかわり合いを持つ存在である事に注目して、「自己沈潜」をもって人間の特徴であると規定いたしました。オルテガによれば、人間は皆周囲の世界が許す範囲内で目を自分自身の内界に向ける事によって、深く自己の内部に入り込んで行く能力をもっているとの事であります。この自己沈潜の能力は現実の世界に立ち向って行く事ができるよう、自己の中に潜む可能性とそれを実現させて行くすべを発見するために自分自身の内なる深奥に入り込んで行く極めて実践的な能力であり、言わば、自然が人間に許す一瞬の息抜きであると見なす事ができます。四か年にわたる学生生活を通して、皆さん方は自分自身の心の内部に目を向け、「私とはそもそも何であるか」、「私にとって一回限りの人生とは何であるか」という実存的な問いに真剣に取り組んで頂きたいのです。

人間とは？　古くて新しい問い

キリスト教的な人間観によれば、人間は皆創造主である神によって、神のみ姿にあやかってつくられ、更に又「天にいます父である神の完全であるように、あなた方も完全になりなさい」と諭したイエズスのみ言葉に従って、常に自己完成を目指して励むと共に、それぞれ与えられた生活の場で宇宙全体の完成に向って協力するように生命を賜ったのです。私たちは私たちの手による最も取るに足らない仕事によってでさえも、この宇宙の完成に仕えているのです。そうなると、皆さん方一人ひとりにとって必らず固有の使命がある筈ではないでしょうか。皆さん方一人ひとりが自分自身に向って「この私が生を受けてこの世に存在している限り、私には果さなくてはならないユニークな使命があり、『私』をも含めた宇宙全体の完成はこの『私』の協力なしには有り得ない。」と考えて頂いて決して傲慢ではないのです。

「人間とは何か」「この私とは果して何であるか」――この古くして、新しい問いに、キリストとは、人間とは神の無限な愛を受けて無の深淵より呼び出され、掛け替えのない生を与えられた被造物である事を強調いたします。人間誰しも自分が愛されている事を自覚する時、「私はつまらない者である。」と言った、ややもすれば陥り易い、自分自身についてのコンプレックスから解放され、健全にして豊かなセルフ・イメージを抱く事ができるのではないでしょうか。人間にとって何が最も不幸であるか、と問われるならば、父である神によって深く愛されていながらも、生涯一度もその愛を体験する事なしにむなしく人生を終えてしまう事ではないだろうかと思います。

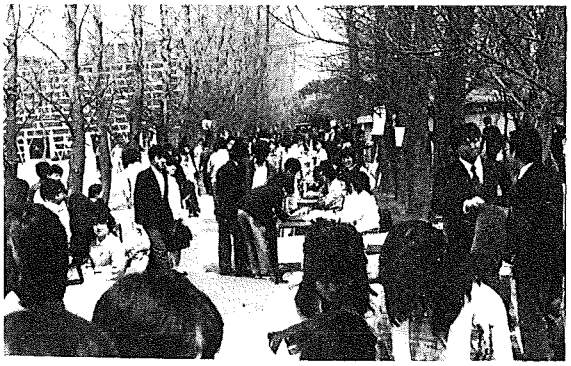
「求める人」であれ！

今日この日から始められた皆さん方の大学生活が皆さん方に豊かな実りをもたらしますように、皆さん方自身の方から何事においても積極的に求める人になって下さい。先程朗読されました聖書の中で、イエズスは「求めなさい。そうすれば与えられるであろう。捜しなさい。そうすれば見付けるであろう。」と仰せになっておられます。学問の研究を通して英知を求め、様々な人たちとの出会いと交わりを通して調和のとれた人間完成への道とすべを捜し求めて下さい。何となれば、求める人だけが受ける事ができるからです。

最後に、本日入学されました皆様方一人ひとりの上に、またご父兄各位の上に、神の豊かな恵みを祈り求めまして、私の言葉といたします。

第二十三回(昭和六十年度)入学式挙行される

花曇りの四月二日(火)午前十時より第二十三回入学式が本学講堂で挙行された。式は聖歌隊の聖歌合唱によって厳粛裡に始められた。聖書朗読入学式の祈りに次いで入学者英語英文学科一四七名、西語西文学科五〇名、仏語仏文学科四六名、神学科一〇名計二五三名の指名が行われた。井上学長の式辞（別掲）に続いて、来賓の中島後援会長と福原同窓会長が祝辞（要旨別掲）が述べられた。式のあとポプラ並木道に待機していた各クラブの部員による新入部員の獲得合戦がくり広げられた。



後援会長中島忠次氏祝辞要旨

激しい受験競争を勝ち抜かれての入学式、誠におめでとうございます。

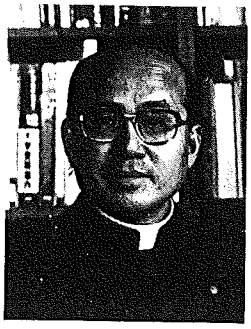
入学案内でご承知の通り当大学はカトリックの宗教的理念に基づいて人格の形成に重点を置き、優れた先生方と僅か千名前後の学生が尊敬し、信頼し合って学業に励んでいる今時珍しい存在の大学であり、施設も整備されており、勉学には最高の環境であります。

教育本来の目的は、学問を通じての人間形成・自立的精神の養成並びに個人の才能開発にあり、この目的に向って励む事が肝要と思います。理屈が多く、自己反省の少ない状態が続けば、社会の落伍者になり勝ちです。他人の立場を思いやり、学友は勿論先輩とも積極的な交わりをもって、一人でも多く良い友をつくってほしいと思います。入学した事で目的を達したと錯覚し、自己の鍛練を忘れ、貴重な大学生活を浪費するような事がないよう努めて下さい。学業に励むと共に、スポーツ等のクラブ活動にも精を出し、四年後に悔いが残らぬよう、有意義な学生生活を送られるよう、お祈りいたします。

同窓会長福原宏章氏祝辞要旨

ご入学おめでとうございます。皆さんはこのすばらしい環境に恵まれた大学を自分で選び、入学を許されたのですから、この四年間をどのように過されるかが皆さんの人生にとって重要なポイントになると思います。自分で選んだ学科目に励む事は言うまでもありませんが、学生時代は社会人としての世の常識を養うという事と人間的に成長できる大切な時期であると思います。それには四つの条件があります。その第一は、一人ひとりの持って生れた個性をどのようにこの世の中で生かせていくのかを考え、育てていくこと。第二は、相手の人の意見に耳を傾け、忍耐強く、どのように愛情を注いでいけるかということ。第三は、いろいろの体験や読書から得られる知識をどれだけ多く身に付けられるかということ。第四は、これらの三つを将来どのような方向に向けていくかを考え、決めることです。

英知大学での四年間の中で、限りない人間成長を追求して下さい。



ご挨拶

学長退任に当って

前学長　傘木澄男

このたび私は三月三十一日付をもって学長職を退任することになりました。前任者岸先生が学長としてご在任中礎かれた英知大学のゆるぎない基礎の上にいっそうの発展を目指して微力を尽してまいりましたが、六年間の在任中特別な発展の跡を残すことができませんでしたことを遺憾に思っています。しかし、この間私どもの中に教育と研究という大学本来の使命に対する自覚が一段と強まったこと、また本学が良心的に若者の教育に当っている大学であるとの社会の声価が定着してきましたことは私の大きな喜びです。これもひとえに本学教職員および学生の皆さん、またご父兄の方々、卒業生並びに本学関係者各位の温かいご支援とご協力のお蔭であります。今あらためてこのことを思い、心から感謝を覚えております。

私立大学の置かれた状況は今後ますます厳しくなることが予想され、緊急な対策が求められていますが、肝要なことは本学の建学の精神であるキリスト教人間観に基づく真の人格形成と、教育・研究の充実という基本を総力を挙げて追求することであると信じます。井上学長先生もこの信念をもって当っていこうとしておられますので、今まで私に賜わりましたご支援、ご協力を井上学長先生にも賜わり、英知大学のいっそうの発展のためにご尽力下さいますようお願いいたします。

私も今後は一教員として、今までの貴重な経験を生かして学生の皆さんのため、大学のために微力を尽していきたいと思っておりますので、今まで同様ご厚誼とご指導を賜わりますようお願いします。おわりに皆さまのご健康と今後のご発展をお祈りいたします。

☆☆☆ 井上新学長の挨拶 ☆☆☆

このたび傘木前学長のご退任により、その後任として不肖私が本学学長に就任する事になりました。傘木前学長のもとに、本学は発展し続け、教授陣は強化され、学生会館が建設され、ローラス大学との交流は一層親密になるなど様々な面からのご活躍の成果が評価されております。

現在、我が国の高等教育機関に学ぶ者は、大学・短大及び高等専門学校をも含めて二一八万人、これに専修学校を加えると実に二五七万人となっております。けれども、十五年後の昭和七十五年を迎えると、学生数が一五〇万人台に急激に減少する事が見込まれています。従って、これからの十五年を展望し、本学が存続且つ発展し続けるよう、対策を打ち出さなくてはなりません。それには、何よりもまず、本学での教育の質的充実とレベルアップへの努力を続けると共に、本学の特徴を打ち出し、更にまた大学を生涯学習の場として広く市民に開放されなくてはなりません。このたび本学にキリスト教文化研究所が発足し、当研究所が中心となって、人間関係講座が開かれたのもその主旨にのっとっての事であるのは言うまでもありません。私自身何分至って若輩浅学の身でありますので、何かにつけ皆様方のご忠告を仰ぎご叱責を賜わる事によって、学長職という重責を果すのにふさわしい人材になるように日夜努力して行かなくてはなりません。これからはますます神の御導きと皆様方の祈りに支えられて、キリストにならい「仕える」という心構えをもって精一杯天職を全うして行く所存でございます。どうか、今後共よろしくお導きの程を伏してお願い申し上げます。

新学長のプロフィル

井上博嗣新学長は明朗・温厚・誠実且つ人の意見を尊重する円満な人柄で、英知大学の学長にふさわしい方であります。

昭和三十四年上智大学文学部哲学科卒（文学士）同三十八年米国バルチモアのセント・メリー神学大学を卒業（S・T・L・）、同四十一年米国オハマのクレイトン大学院卒業（M・A・）、同四十七年四月より一か年間京都大学へアメリカ文学研究のため内地留学された。学術研究も旺盛で、著書・訳書・その他学術論文も多く、顕著な研究業績をあげておられる。

昭和四十一年英知大学文学部講師、同四十四年助教授、同四十七年より七年間学長広報室長兼務、同四十九年九月より五十二年三月まで図書館長兼務、五十一年七月より学校法人英知学院評議員就任、五十二年教授昇任、五十八年英語英文学科長兼任、本年四月英知大学長に就任。

「人間関係講座」開催される

―本学キリスト教文化研究所主催のもとに―

学術研究面のみならず、教養、職業、技術のあらゆる部門において生涯教育の必要性が高く評価されて久しくなりつつある今日、大学は市民社会各層の学習の意欲や必要に応じて、可能なかぎりの貢献をなすべく公に開放されるべき時代となった。

本年四月より本学にキリスト教文化研究所が発足する運びとなり、当研究所が中心となって市民に開かれた大学づくりの念願を実現させる媒介となることとなり、その最初の試みとして学生たちのご父兄をはじめ、広く一般市民の方がたのために公開講座を開催することになった。

さしあたって、本年度は私たちにとって最大の関心事である「人間とは何か？」という古くして新しい課題ととりくみ、人間を心と体との両面において多角的、多面的に検討してみることにした。

第一回講演は、すでに5月2日、「女性の四季」というテーマのもとに、淀川キリスト教病院精神科医長工藤信夫先生によって行われ、一五八名がこれに参加、すこぶる好評を博した。

第二回目は、6月7日(金)午後一時より「脳と心と体」と題して、阪大医学部教授、橋本一成先生による講演が予定されている。8月を除く、7月から来年3月迄に第一木曜日、午後一時から本学で。受講料は一講義のみ受講の場合七百円。一年分(全十回)前納の場合、六千円。申込先は本学キリスト教文化研究所まで。

キリスト教文化研究所

所長　井上博嗣
副所長　岸英司
主任　ヴィセンテ・アリバス

図書館の充実を！

この度、図書館長に神学科のベーキ教授が任命されると共に、専門家の越知昌夫氏を次長に迎え入れられた。越知氏は大阪府大・帝塚山大学の図書館主任及び次長を歴任された経験者。また古田富子氏が主任として現場事務指導に当る。これによって本学附属図書館は一層の充実を計る方向へ一歩前進しつつある。

越知氏は「カトリック信者として人生の秋をカトリック大学にお捧げさせて頂く事は私にとって身に余る喜びです。本学での第一印象は、カトリック大学として名実共に堅実であるという事。これまでの三十年余りの経験を生かして、より一層の発展のためにお役に立てば……と思っております。」と抱負を語った。

交流の実を結んだ学外オリエンティション

―桜花乱れる湖畔にて―

新入生の学内オリエンティションは四月二日の入学式から三日間行われ、この間に教務課、学生課、職業指導課、図書館、宗教主事室、学生会のガイダンスが例年のように実施された。一週間後の四月十二日、十三日の二日間昨年に続いて琵琶湖畔の近江八幡休暇村で学外オリエンティションが行われ、四〇名の先生方と学生会を中心とした二五名の在学生が参加して有意義な二日間を過した。

当日はあいにく雨模様であったが、新入生・在学生・教職員約三〇〇人が六台のバスに分乗して現地へ向った。新入生は二つのグループに分けられ、神学科・西語西文学科・仏語仏文学科は本館に、英語英文学科は別館に投宿し、別掲の日程表に従っ

てオリエンティションが行われた。

プログラムは入村式、昼食の後、学長・学生部長より本学の特色と教育の実際、学生生活の基本について話があり、続いて教養課程ガイダンス、クラス別懇談会が行われた。その後昨年度の反省を踏まえて、新入生と先生方・在学生との触れ合いの場を少しでも多くとの配慮から設けられた夕食までの自由時間は、新入生にとって先生方や先輩学生との様様な交流体験が持てて非常に好評であった。夕食後は小雨に煙る湖畔の桜を窓外に見ながら、大学歌の練習、夕の静修に続いて在学生が中心となってクラス別に余興が行われ、楽しく打ち解けた雰囲気の中でクラスの連帯が一層深まった。

翌日は全員静寂な祈りの一時を過し、朝食後「大学生活を実り豊かに、皆で語り合おう」という企画で本年新たに取り入れられたパネルディスカッションが行われた。先生・在学生・新入生からパネラーを選出して、「男女交際」「孤独と対人関係」「ピーターパン・シンドロームの克服」などのテーマで活発な討論が行われたが、新入生にとって意義のある一時であったと言えよう。

キリスト教的雰囲気の中でクラス単位での親睦と、先生方・先輩学生との温かい触れ合いを通して、建学の精神を体得し、希望に満ちた学園生活への定着を図る事を目的とした学外オリエンティションは多数の先生の参加を得て本年も無事終了したが、今後は更にプログラム・運営方法など新入生のニーズに合わせて、検討・改善を加え、本行事の益々の発展を図りたいものである。（弥左記）

昭和60年度 学外オリエンティション日程

4月12日（金）	9:00	大学集合　クラス別集合、点呼、バス分乗	
	9:20	出発 休暇村到着　約120分	
	11:30	入村式　本館前広場（但し雨天の場合本館、別館の会議室）	
		神学科 イスパニア語 フランス語 イスパニア文学科・フランス文学科 本館	英語英文学科 別館
	12:00	昼食	昼食
	13:00	学長の話(A)	学生部長の話(D)
		教養課程ガイダンス(A)	クラス別懇談会 (D)英1 (E)英2 (F)英3 90分
	14:45	休憩	休憩
	15:00	学生部長の話(A)	学長の話(D) 15分
		クラス別懇談会 (A)西 (B)神 (C)仏	教養課程ガイダンス(D) 90分
	16:45	新入生と先生自由交流	新入生と先生自由交流 60分
	18:00	夕食	夕食
	19:30	大学歌の練習(A)	大学歌の練習(D)15分
		夕の静修(A)	夕の静修(D)20分
		余興	余興
		入浴（自由）	
	22:30	消灯	
4月13日（土）	7:00	起床	
	8:00	ミサ　自由参加(E) 40分	
		朝の静修(A)	朝の静修(D)20分
	8:30	朝食	朝食
	9:30	パネル・ディスカッション(A)（先生、新入生、在校生）	パネル・ディスカッション(D)（先生、新入生、在校生） 90分
		まとめ	まとめ
	11:00	自由時間　60分	
	12:00	昼食	昼食
	13:00	本館前集合、点呼、バス分乗	
	15:30	園田着、解散	

人事

専任教員
退任（三月三十一日付）
英知大学学長　傘木　澄男
（財務部長兼務）
文学部長　ホセ・ルイス・アルバレス
図書館長　中野　正勝
英語英文学科長　井上　博嗣
教養課程主任　玉谷　直寶
宗教主事　松本　信愛
退職（三月三十一日付）
講師（英語英文学科）ジョン・E・バーガー
講師（教養課程）H・シュヌーゼンベルグ
就任（四月一日付）
英知大学学長　井上　博嗣
（財務部長兼務）
文学部長　大西　忠雄
図書館長　G・ベーキ
英語英文学科長　原　一郎
教養課程主任　稲葉　哲雄
宗教主事　ヴィセンテ・アリバス
新任（四月一日付）
教授（英語英文学科）木鎌　安雄
講師（教養課程）三浦　太郎
講師（英語英文学科）ジョセフ・フィナティ
昇格
助教授（教養課程）沼野　元義
助教授（英語英文学科）井田　規文
助教授（西語西文学科）山口　忠志
海外研修　教授　西山　俊彦
事務職員
退職　図書館　朝田　恵子
図書館　高見テル子
新任　図書館次長　越知　昌夫
庶務課　西谷　浩子
教務課　輸嶋　秀実
昇任　管理課長代理　山川　洋
総務課主任　足立みち子
管理課主任　富迫　義治
図書館主任　古田　富子
兼任　広報室長　西田　弥

研究室だより

芝垣哲夫助教授（英語英文学科）
「日本文学の翻訳」（共著）
旺史社（一〇七頁。九八〇円）
「実践翻訳入門」（共著）
旺史社（一〇六頁。九八〇円）
井上博嗣教授（英米文学）
五月十七日、午後一時より立正大学で開かれたヘンリー・ソーロウ協会全国大会において「ソーロウとキリスト教」と題し、約一時間にわたり研究発表を行った。

新しいLL教室

昭和六十年三月末、教室棟二階に従来あったLL教室は、最新の設備を取り入れて新しく生れ変わりました。

昭和五十九年三月に完成した教室棟五階のものと合わせ、本学には二つの最新式LL教室が設置されているわけです。

このLL設備を使って次のような学習をすることが出来ます。

(一)一つのプログラムでクラス全員が一緒に学ぶ授業（ベイシックレッスン）

(二)二種類のプログラムを使用する授業（アドバンスレッスン）

(三)学生間の会話を中心にして進める授業

現在、ほとんどの授業は(一)のベイシックレッスンで行われているようです。また、ある先生はミキシング機能を使ってご自分の声を学生に録音させておられるようです。

それぞれのLL教室ではLL設備の他にカラーテレビを六台、ビデオデッキを二台備えています。最近特にビデオ教材を使って授業をする先生方が増えています。この六台のテレビにスライドを映し出すことも出来ますし、オーバヘッドプロジェクターのように先生方が机の上で書いたものを拡大してテレビに映し出すことも出来ます。これら視聴覚設備の今後ますますの活用が期待されます。（中西記）